

歯科口腔外科

教授 戸塚盛雄
講師 山本康一
助手 渡辺裕

◇ 研究概要

当科における主な研究テーマは、口腔領域における悪性腫瘍の病態解析ならびに、より適確な治療法の確立に関する研究であり、従来より東京医科歯科大学にて研究を行ってきた。

1) 1979年度は、臨床研究において上顎癌、舌癌、舌癌における顎部リンパ節転移に対する臨床統計的検討、さらに甲状腺原発腫瘍症例を検討した。

a. 上顎癌：上顎癌の治療法の推移を3群に分け、それぞれの子後成績を検討した。

b. 舌癌：1964～1978年までの15年間に治療した172例の療法別治療成績を検討した。

c. 顎部リンパ節転移：顎部廓清術施行例を、転移の有無により2群に分け成績を比較した。

d. 甲状腺原発癌：上顎部腺系悪性腫瘍患者に顎部廓清術を施行し、その後8年目に甲状腺の原発巣が発見された1例について発表した。

2) 組織培養

口腔正常組織ならびに口腔領域各種良性および悪性腫瘍を初代培養し、細胞動態学的に検索、顕微分光光度計を用い核内DNA量の測定を行った。現在実験的舌癌を用いin vivoにおける細胞動態学的検索、ならびに初代培養に移しin vitroにおける細胞動態学的検索法を用い、発癌過程の動態、より適確な治療法の確立に関する研究について暫時準備中である。

◇ 原 著

1) 大木葉博通, 戸塚盛雄, 仲井義信, 清水正嗣, 塩田重利, 迫田紀子, 石橋利文：下顎歯肉に生じたVerruciform Xanthomaの1例, 日口外誌 25: 81-84, 1979.

2) 清水正嗣, 塩入重彰, 山本康一, 横尾恵美子, 戸塚盛雄, 岡部貞雄, 宇都宮讓二：8年後に甲状腺原発巣の見出された上顎部転移性腺系悪性腫瘍の1例, 日口外誌 25: 1979.

◇ 学会報告

1) 清水正嗣, 塩入重彰, 山本康一, 横尾恵美子, 宇都宮讓二：8年後に甲状腺原発巣の見出された上顎部転移性腺系悪性腫瘍の1例, 第113回日本口腔外科学会関東地方会, 1979. 2, 東京.

2) 山本康一, 塩島一夫, 戸塚盛雄, 大西正俊,

清水正嗣, 塩田重利, 中村 正, 堀内淳一：制癌剤持続動注施行の上顎癌23例における臨床的検討—放射線照射と開洞療法との併用による治療成績—, 第33回日本口腔科学会総会, 1979. 4, 東京.

3) 塩島一夫, 戸塚盛雄, 佐藤建夫, 柳沢繁孝, 清水正嗣, 塩田重利：上顎に発生した巨細胞修復性肉芽腫の1例, 第33回日本口腔科学会総会, 1979. 4, 東京.

4) 鈴木加代子, 水谷 雄, 尾島富貴子, 岩城博, 戸塚盛雄, 大西正俊, 清水正嗣：放射線療法に奏効した広範囲進展上顎良性多形性腺腫の1例, 第33回日本口腔科学会総会, 1979. 4, 東京.

5) 戸塚盛雄, 佐藤建夫, 山本康一, 立花忠夫, 天笠光雄, 岩城 博, 清水正嗣, 塩田重利, 堀内淳一, 奥山武雄, 竹田正宗：最近15年間に経験した舌癌の療法別治療成績, 第3回頭頸部腫瘍学会, 1979. 6., 小田原.

6) 岸村真澄, 結城勝彦, 横尾恵美子, 山本康一, 百瀬文雄：口腔領域に生じた神経鞘腫2症例の組織培養所見について, 第5回日本口腔外科学会北日本地方会, 1979. 札幌.

7) Yamamoto K., Shimizu M. and Umeda T. : Clinical evaluation of the 23 patients with carcinoma of the maxilla treated with cortinuous intraarterial infusion with antineoplastic agents—therapeutic experience with combined use of radiation therapy and antrostomy. International Association for Maxillo Facial Surgery. 1979. 9, Prague.

8) 山本康一, 戸塚盛雄, 立花忠夫, 岩城 博, 大西正俊, 清水正嗣, 塩田重利：口腔領域悪性腫瘍の顎部リンパ節転移症例の検討, 第24回日本口腔外科学会総会, 1979. 10, 名古屋.

9) 中村 正, 竹田正宗, 塩田重利, 山本康一：放射線治療, 化学療法および手術による上顎洞治療の結果の検討, 第20回日本歯科放射線学会, 1979. 10, 新潟.

検 査 部

教授 桜川 信男

◇ 研究概要

1) 血管内凝固症候群の病態生理並びに治療：

臨床各科領域にみられる血管内凝固症候群は先行する基礎疾患に特有な凝固活性化の『引き金物質』に基因する特色ある症状を示すが、凝固活性化による血栓形成と凝固因子の消費による出血現象がみら